訳し損なわれた文字

ジャック・レヴィ

「美しき誤訳」(Les belles infidèles)^(注1)というフランスにおけ

る悪しき伝統によって、翻訳をめぐる議論がされるたびに、エスプリ(精神)とレトル(文字、字面、または字義性)の対立が問題にされる。そして、原文のレトルに忠実であつてこそ作家のエスプリに忠実であるのだという自明であつたはずの理をいわずに転覆させた、この自国文化・言語中心主義的姿勢は、幾分かはその傲慢な主張を弱めてきたものの、「直訳」に対して「意訳」を評価するといった形で翻訳に携わる多くの者たちの間に根強く引き継がれてきているのも周知のことである。そうした形と意味の二元論の批判が、モニエやメシヨニックに継いで、緻密な翻訳論を築き続けたベルマンの前提であつたのだが、ここでは、翻訳は「レトルの翻訳」^(注2)でしかありえない、という彼の主張が、レトルの定義をめぐってどのような問題を提起

していくのか探っていきたい。

ベルマンが、翻訳に見られる一連の傾向として、美文化や明晰化、合理化などといった様々な歪曲を分類した上で、「切り抜かれた形で」(en creux)といった意を持つ表現を用いて、提起するレトルのさしあつたの定義は「歪曲の体系が攻撃するすべての次元である」(la lettre, ce sont toutes les dimensions auxquelles s'attaque le système de déformation)^(注3)となるのだが、そこでレトルにある種のリミットの機能をもたらしていることに注目したい。翻訳者が、「歪曲のシステム」と呼ばれる力によって、ときには自覚を持たないまま、必然的にレトルから引き離されていくさまはレトルの性質そのものと複雑な関係をむすんでいるからなのではないだろうか。「レトルの翻訳」が、「全体」の意義やエスプリと想定された「意味」を指す「歪

曲」としての「意識」への異議申し立てではあるものの、レトルと名づけられる字義性 (literal) が直訳不能、あるいは直訳を拒む性格を持った起点言語の要素すべてを指していると思っけ止めるかぎり、一語一語の意味作用 (signification) を追求する「直訳」に還元されえない、「意識」と呼ばれるような手法とは異なった飛躍を強いるものであるのは明らかであろう。つまり、原文におけるレトルの次元が見失われたとき必ず「歪曲」をまねいてしまうと考えるのは、起点言語の一語一語の意味内容をできる限り、目標言語の規範を無視してでも、正確に訳していくのが「レトルへの忠実」であるという主張を強いるのも決してないのだ。

いささか簡略化して言うならば、慣用句的な表現の特異な用法や、意味伝達の体系としての言語コードに対して断絶やズレを起こして、通常の伝達とは異なった意味をもたらす作用を産出するのが、文芸作品におけるレトルの次元であるところであえず規定した場合、翻訳者はそうした作用の単位を見分け、その結果としての意味内容を訳すというのではなく(ただし、訳すという行為が「意味する」シニフィアン置き換えであって、「意味される」シニフィエではないといった議論に対しては、「意味されている」シニフィエがまたシニフィアンとして作用するメトニミーの支配下にあるテキストに対しては無効であると付け足しておかねばならぬ)、意味作用を引き起こす過程そのもの (signifiance) を目標言語において再現させることになる。

そこで、そうした「再現」が翻訳によるレトルの起点言語から目標言語への転移であり、原文の特異性への忠実さであると、想定できよう。ところが、レトルを詩的言語の構造的エフェクトとしてとらえた場合、翻訳によってレトルが転移されているか否かを定める決定的な基準ははつきりしている。すなわち、「歪曲の体系」によって回避されてきた、起点言語特有あるいは作家特有の翻訳不要あるいは不能と判断されていた諸表現が、目標言語への「レトル」の転移によって異なった姿で(場合によっては、異なった「意味」で)「表されて」いなければならぬということと、さらに、原文において潜在的に働いていたレトルが、翻訳を通して始めて顕著化しうることである(無論、それは、原文においてあいまのままにされていた要素が翻訳によって説明されてしまうというありがちな「歪曲」の結果とは無縁であるが)。そして、このように起点言語と目標言語の両方の言葉に対してレトルが超越論的ともいえる価値として位置を与えられていることが、ベルマンを始め、翻訳について論じようとする多くの研究者がベンヤミンの「翻訳者の使命」が現代における最も重要な翻訳論であるとみなしてきた根拠でもあることは明らかであろう。

言語間に潜む「親縁性」を純粋言語への射程と結びつけるベンヤミンは、「志向されるもの」(das Gemeine)と「志向するその仕方」(die Art des Meinens)を引き離し、「志向する仕方は、この二つの語の元では互いに敵対しあうのに対して、それらが

属する二つの言語においては互いに補完しあう」(注4)と述べるのだが、彼の言う「親縁性」は、言語系統上の語族を意味するものではなく、むしろ「純粹言語」と名づけられた「形式」を、言語間における「言い方」の絶対的な差異によってこそ切り抜かれる、補完性Ⅱ類似性として描かれている。ここでは、パベル以前の単一言語の再出現が語られているのではなく、そうした「形式」を表し、発達させる言語としての翻訳が、「二つの語」を隔てる差異、すなわち「志向されるもの」ではなく「仕方」に潜む可能性を現前化することによって、いかに「作品」の栄光とよばれる「存える生」を担いうるのが論考の対象となるのだが、デリダが指摘しているように翻訳者の「使命」は、「言語間の起源的契約、そして「純粹言語」への願望を視野に入れ始める限り、「志向されるもの」を除外する。」(注5)

しかし、字義性としてのレトルが意味作用の能動性そのものの形を記すものであるとした場合、レトルは単にシニフィアンの同義語なのではないかという疑問が浮かんでくる。あるいは、特定の作家や作品におけるシニフィアンの作用が、伝達コードとしての言語が提供する意味とは必ずしも一致しない、特定の意味ないしは複数の意味を結果として持つ(さらに、当然、こうした「効果」としての「意味」は視覚的、聴覚的感覚をも含むであろう)、一般に辞書に収集される単語や表現には収められない言語単位であると考えて、レトルはそうしたシニフィアンの形成と受理の媒体となる表記法に過ぎないと結論付けてよ

いのだろうか。

シニフィアンとレトルの関係、レトルがどのようにシニフィアンの意味作用に対して分割や断絶の働きを持つのかについて議論を進めるに当たって、ラカンの言語論におけるレトルへの言及は貴重な手がかりとなる。「リチュラール」(注6)と題された、精神分析と文学の関係、および日本からの帰路を主題に、レトルの性質についての考察を通して書かれた論文では、レトルはシニフィアンと混同されるものでもなければ、シニフィアンとして作用するものでもない、ましてシニフィアンに対して一次的なものではありえない、と、暗示的にデリダと一線を画する形で、ラカンは立場をはっきりさせた上で、あくまでもレトルは言語の結果、「雲」(note)としてあり、「エクリチュール(書字)はシニフィアンの写しではなく、言葉としてのその作用の、つまり言葉を話すものによって鍛え作られたものの写しである」と記している。その十五年ほど前に書かれた、エクリ(注7)の冒頭に置かれた「盗まれた手紙」についてのセミネールでラカンは、ポールの短編が繰り返る主人公たちの動きを率いる、いわば主役のレトル(書簡)を、受け手にいずれば必ず届く引取り未了の書簡、シニフィアンを届ける(無意識の)媒体としてなぞってみせた。つまり、その内容が明らかにされることもなく、登場人物の運命を定めていくレトルは、無意識におけるシニフィアンによって決定される主体の位置、さらにはシニフィアンの定義を雄弁に物語っていることとなるの

だが、主体はシニフィアンによって決定されるものの、それはシニフィアン作用がもたらす「意味内容」によってではなく、あくまでもその「作用」のいわば「能動性」によってである。そして、ラカンのミニマルな定義が示すとおり、他のシニフィアンとの差異によってのみ規定されるシニフィアンは、主体をその他のシニフィアンに対して代理・表象するのだが、そのシニフィアンの「書簡」として働くレトルルの特性は、シニフィアンが非—自己同一的であるのに対して自己同一的であることとなる。したがって、「無意識における文字の審級」の中で、フロイトが無意識の形成物として夢を「文字通り」読むのだとラカンが述べるとき、文字化された構造がいわば音声化されていく過程の中で、音素の構造が支えるシニフィアンの連鎖が読み解かれるのであって、精神分析における「解釈」は、象徴的イメージの連想に基づく意味解釈ではないという原理が主張される。さらには、「同一化」(Identification)のセミネール(1961)の②からは、書字の生成過程をフロイトのいう「一なる印し」、すなわち対象の諸特徴のひとつへの同一化に結びつけることになるのだが、そこで、いわゆる表意文字の場合、用いられうる線(traie)は消却された形態的なものの残滓として考えられ、実はそれは対象の統一性としての「一」をなすことになる。また、印しに類似し、ひとつの言語から別の言語へいわば自己同一的に移される固有名詞が主体と特権的な結びつきを持つ。つまり、主体が固有名詞によって名指されるとき、それは「一なる

印し」としてのレトルルを読むことに等しく、主体をこの一なるシニフィアンの刻印が抹消することこそによって、主体は指し示される。したがって、レトルルはシニフィアンとは識別されるもの、この「一」なるシニフィアンの材質的支持体となりうる特性を持つことになる。さらには、ラカンにおけるレトルルの次元は理論の鍵概念の伝達と説明を担う、代数学的な形態を持つた書字、マテームを彼が築き上げていくにつれて重要性を増すのだが、たとえば、「意味されるもの」、シニフィエの作用をもつシニフィアンの欠如(manque)を示すシニフィアンとして、 Φ 、 a 、 $S(A)$ といった三つの「レトルル」が提示され、識別の記述が進むにつれて、「意味作用」的な分類から引き離されていく。図式的に説明すると、象徴的ファルスの記号としてあつた Φ は、現実(éaie)を支配する幻想(fantasme)の論理における、現実界(éel)が想像界に強いる表象不能性としての欠如を示すのだが、その機能は「意味」の享受をゆるす、すなわち「意味作用」を支える、フロイトの「快感原則」に当たる、「かろうじて」の(余剰)享樂を確約するものとなる。鏡像化不能たる身体的部分的「破裂」(身体から「破り取られる」対象としての乳房、糞便、声、そしてまなざし)として、欲望の原因である対象の欠如(この世の対象ではないという意味の「欠如」を示す対象 a は、精神分析家の言説が象徴界から現実界に迫る「解釈」という「行為」によって、「みせかけ」(semblant)、仮像の存在者の位置から、現実界がのこす「残滓」へと転落、消滅

していくプロセス、すなわちリミットとしてのレトルそのものを示す。そして、シニフィアンの場合としての大他者における他者の(「大他者の大他者はいない」や「メタランガーージュはあらぬ」(il n'y a pas de métalangage)といった表現で示される、精神分析の真理としての「大他者の不在」を意味する) 欠如を記す表記S(A)は、想像界から象徴界に赴くことによって体験する大他者の不在という形を取る真理、すなわち大他者の絶対的他者性という、半ば言う(être)ことしかできない、「すべて」としての普遍性たりえない、実感はできても語るることのできない、フェミニニーヌなる「別」の享楽、大他者の享楽に迫ることによってその希薄な姿を現す真理を示すこととなる。なお、その享楽の領野は「性関係はあらぬ」という言葉で言い表されるのと同時に、「エクリチュールの苦行は、それとともに性関係が成立するところの」それは書かれている」(être et cent)に接合することによってしか終わることがないように私には思われる」と、「リチュラテール」の最後の結びがうかがわしているように、意味作用のリミットとしてのレトルの彼岸に位置づけられる。

おそらく、こうしたラカンによる精神分析の経験の理論化の過程の中で規定されるレトルと文学作品とその翻訳をめぐる語られるレトルは、結局、同型異義語に過ぎないのではないかといったような反論は容易に想像できるであろう。にもかかわらず、レトルを意味作用の土台に還元するのではなく、シニ

フィエに「穿たれた条溝」がえがく「波打際」、すなわち意味作用の限界を示すリミットとしてとらえ、従来表象不能としてしか表されてこなかった領域の輪郭を切り抜く物質性として考えるのは、翻訳という「過程」を考えるに当たって、やはりきわめて示唆的であることには変わりない。ベルマンのいうように「意味」への忠実といったような考えは矛盾であろう。また、忠実でありえるとすれば、それは意味の飽和を抑え、「意味される」シニフィエ(すでに述べたように、多くの場合そのシニフィエもまたシニフィアンとして作用するのであって、シニフィエは基本的に志向対象足りえないことを念頭に置かねばならない)の型を切り抜き、その形を文字通り「なぞる」レトルに對してのみであろう。そして、そうしたレトルは、テクスト理論において不可欠な概念となった、作家の意図や文体といった範疇には決して還元できない「エクリチュール」や「言語の物質性」の類義語のように映るであろう。しかし、ラカンが「享楽と知の間に波打際」を形成するものとしてその特性を描き出しているとき、ベルマンが翻訳における「歪曲の体制」によって壊されていくものとして位置づけるのと同様、やはりリミットとしての性格が最も際立てられているのではないだろうか。ラカンは、象徴界としてのシニフィアンとは異なる、シニフィエつまり想像界に「穿たれた条溝」としてのレトルを現実界の境界線としてみなす際、「向こう」の「書かれないことをやめなさい」(ce qui ne cesse pas de ne pas s'écrire)「不可能としての

享楽の領野を「非—知」や「物自体」といった、彼が「蒙昧主義」と呼ぶ神秘性を漂わせる言葉に帰することを拒む。言い換えるならば、意味作用の体系、すなわち非—自己同一性に依拠するシニフィアンとしての「—」によって産出される意味を自己同一性の材質を持つレトルは、妄想解釈からの逸脱として、(peu-de-sens, ab-sens, contre-sens、といった造語が示す)いわば「非—意味」、意味の亡霊の領野へと引き寄せるのだが、それは、「—」なるシニフィアンの出現としてのファルスから現実界の残滓としての「見せかけ」的存在者である対象a、さらには別の享楽としてしか現れない異性としての真理へといたる、根源的に他なるものとの遭遇、すなわち「書かれないことをやめる」偶然性の契機でもある。

しかし、「波打際」(littoral)と呼ばれるレトルの存在は、具体的に翻訳の作業に携わる者にとってどのようなことを暗示してくれるのであろう。『翻訳者の使命』の冒頭を参照して、翻訳者がおかれる立場について考えてみた場合、次のような問題提起がなされる。作品を読んで得る、ハッとさせる力、奇妙な悲しみ、不気味な快感、解くことの出来ない謎のようにはあらわれてくる問い等、一般に「感銘」と呼ばれる情動が、単にその作品によって語られている「物語」や「時代背景」、「人物像」といった「内容」のみによるものであれば、直訳であろうが、意訳であろうが、ひいては脚色であっても、「感銘」はさほど変わらないであろう。しかし、それが作品の「詩」や「美」、一般

に「文体」ないしは「本質」や「神秘」とされるものによるのならば、「内容」には決して還元されえないのだと最もよく知る立場に立つのが「翻訳」という「使命」を背負った者となる。すると、作品の「核心」、いわば「謎」として作用するものを再現するためには、その謎を解くことが前提となるのではないかといった、「逆説」が浮かび上がってくる。というのも、翻訳者が単なる「読者」ではないことははっきりしていても、訳そうとする「作品」の「本質」や「謎」に迫ろうとする批評家と願望を共有するものでも必ずしはない、といった事柄は誰の目にも明らかであろう。また、そのような作品の「謎」は、解かれることもなければ、完全に再現されることもないというのが翻訳の宿命であるといった観点は、作家の間をはじめ、根強く広がっている。しかし、ここで肝心なのは、「読者」とも「批評家」とも翻訳者の立場は異なり、意味解釈、すなわち「読む」ためにあらぬ、作品に潜められた次元(とはいっても、それはポーの短編における書簡のように目の前にあるのだが)に身をさらさねばならぬということであろう。それを「判読不能性」(ilisible) (注)と呼ぶことにしよう、すなわち、翻訳における「レトル」の姿は「読む」ことの出来ない「もの」としてあるということである。そうして、そのような「判読不能性」を意識によって回避するのではなく、あえて「歓迎」するというのがレトルへの忠実であるということになるのだが、その「過程」を記述することは出来ても、その「方法」を定めうるような、技

法の説明と規定は、論外ではないにしても、難しいであろう。

とはいっても、そこからは、もはや翻訳者の才能や想像力に委ねられた領域であると言ってしまうて満足できるのであろうか。むしろ、精神分析を受ける「分析者」(analysand) (註10)の立場との比較が許されるのなら、翻訳者は翻訳への欲望を引き起こす対象aとしてのレトルを前にして、意味の妄想解釈と判読不能性の間で、断絶と決定の作用としての「解釈」が原文から届くのを待ち続けているのではないだろうか(当然、それはペンヤミンが「作品」はふさわしい翻訳者を待ち続けているのだということによって暗示している考えと矛盾していない)。「解釈」を下すのは原文の側にあることというのは、翻訳者が翻訳の問題を抱えているとき、待ち続けていれば、最終的にはその問いへの答えが常に「向こう」から返ってくるのだという彼の体験を考えれば、自明ですらあるであろう。

無論、レトルがどのような特徴を持って作用するかは個々の作品によって異なる。レトルの次元がほぼゼロ度に近いような錯覚を与える「透明」なテキストもあれば、まるでそこでえがかれている人物や背景、展開する物語が、レトルの「密度」から見て取るにたりないもののように映る作品もあろう。いずれにしても、レトルが測量可能な対象ではないことは歴然としている。また、その作品が含む言表から、自らを支えるレトルの特性についてのメッセージを汲み取れるとしても、それは常に曖昧なものでしかありえない。というのも、そうした「不透明

さ」によってこそ、そのメッセージは伝えられているからである。翻訳者はそうした「不透明さ」を単なる「理解」の範囲でしか受け入れていない場合、翻訳の文章を彼が抱いた、特定の心理・伝記的、あるいは「思想」的作家像に基づく作品解釈の色彩に染めることにとどまるであろう。繰り返して言うならば、翻訳者に要求されるのは、直訳による一語一語の意味の復元ではなく、起点言語における固有名詞の表記法、造語、特殊な記号価値を持つ定型の繰り返し、動詞の時制やアスペクト、形容詞、副詞、擬態語の様々な用法の文体的価値など、テキストの表層に現れる、多くの場合翻訳不要、あるいは翻訳不能とみなされる諸要素、すなわちレトルの局所的な作用を實際訳してみせるにしろ、多くの場合訳さないまま潜在的な要素として復元させるにせよ、そうしたレトルの作用の痕跡を「表す」(manifest)ことであろう。また、起点言語におけるシニフィアンの網や、物語調と言説調の入り混じり、語りのシックエンスの前後関係など、露呈されなまま作品の流れを左右する諸要素を、当然「隠された」、解明されなままにしておきながらも、目標言語独自の表現資材を用いて暗示することは出来るであろう。そうした翻訳における、いわば「見え隠れ」の過程をたどる作業は、翻訳者の経験やスキル、センスに依拠するものだという観点を取ること出来るであろうし、そうした技法を体系的な方法論によって記述することを目指す研究も考えられるであろう。しかし、レトルの翻訳とは、こうした言葉の水面で繰り返り広げら

れる見え隠れの演出に尽きるのであろうか。翻訳によって始めて浮上するリミットとしてのレトルの事後性は、むしろ異なる「持続性」を表すのではないか。すなわち、訳そうとする作品において、レトルを「書かれないことをやめない」享楽とその享楽の領野に迫ることによって「書かれることをやめない」、「症候」(symptome)としてのエクリチュールとの境界線としてとらえた場合、そこで生じる絶え間ない言語の揺るぎ、「意味」形成の方向をいわば逆流する「判読不能性」が「形」を与えられることを求め続けているのではないだろうか。そして、その「持続性」の「形」を切り抜くことを地平線に置くことによって、翻訳者は始めて、必然的に訳しそびれた「対象」を、かろうじて表しうるのではないだろうか。

注1 「不貞の美女」という意味に掛けて、原文に忠実ではないが、いや、むしろ忠実でないからこそ「見事」であるときれる訳。

注2 traduction-de-la lettre、と一語で表記するのだが、そのなかの traduction という言葉は解釈論における「解釈」の意、味合いを持つとも考えられる。

注3 Antoine Berman, *La traduction et la lettre ou l'ambigüité du latin*, Seuil 1999, p.67.

注4 「翻訳者の使命（浅井健次郎訳）、ベンヤミン・コレク ション2、ちくま学芸文庫。

注5 Jacques Derrida, «Des tours de Babel» in *Psyché, Galilée*, 1992.

注6 Jacques Lacan, *Littrature in Autres écrits*, Seuil 2001 (若森 栄樹の日本語訳「リチュラテール」現代思想を参考にした)。

注7 アリストファネスの喜劇 *Les Nuées* からの借用。

注8 Jacques Lacan, *Écrits*, Seuil 1966.

注9 「判読不能性」とあえて呼ぶリミットとしてのレトルは、中上健次の「奇蹟」の翻訳によって体験したそのものであった。この小説の文体は、井口時男が解説（朝日文庫）で述べているように「説経節から浄瑠璃、浪花節まで、この国のあらゆる語り物の声調を踏まえて、ほとんど、声涙ともに下る、とても言うしかない文章の悲痛な節まわし」に満ちた、この作家の到達点でもあり、必ずしもいわゆる「実験的」な文体ではなかった。にもかかわらず、いくら読み直しても、読めない不透明な力がこの文を染めていた。小説全体のきわめて特異な構成、静かにうねっていく長いセンテンス、それまでの作品との難解な、時には矛盾した連続性、それらすべて翻訳を困難にさせる要因ではあった。と同時に、訳すにつれて、明らかに、単なる読書ではその姿を現さない、語りと人物の行方を決定していく厳密な論理性が潜む「持続性」が字面に浮上してきたので

あった。その「持続性」は、たとえば、動詞のアスペクト的価値を極端に強め、完了相と未完了相の対比が、動詞が示す過程を総体的にとらえる相からその過程をいわば分割してその一時点を焦点化する相まで、複雑な時間の表現を築いていくのだが、時制の形だけでは容易に識別できるものではなかった。そうしたレトルの次元における必然性の働きは、特異なアイロニーにみちた、複雑な宗教的表象や、語りの構想を支えている、一種の無制限の時間に身を委ねてしまった二人の人物による、「未来の記憶」と「過去の予

注10

言」とも呼ぶべき物語時間の錯綜まで引き起こしていたのだが、その詳細の分析は、機会を改めて書くことにしたい。「分析者」という用語は、ラカン以降、被分析者あるいは患者という用語の代わりに使用されてきたが、この用語は、患者は「分析される」ために分析家(analyst)の元へ行くのではない、ということを端的に示している。つまり、分析者こそ、語り、連想し、基本原則に従う義務を負っている。」(R・シエママ編、精神分析辞典、弘文社、三二七頁)。